

【英文要旨】

Ichimon Fumon in Shingon Doctrinal Debate Texts

KITAGAWA Shinkan

Ichimon fumon (一門普門) is a term used in Shingon Buddhism to differentiate among maṇḍala deities according to the features of the body of the buddha they represent, and the debate on the doctrinal issues that arise thereof. The debate concerns which maṇḍala deities correspond to *ichimon* and which to *fumon* based on passages in the *Darijing shu*, and whether those virtues extend to both. At present, the usual understanding is that *ichimon* (individual gates) refers to the plurality of deities, while *fumon* (universal gate) indicates Mahāvairocana. To arrive at that conclusion, the relationship between *ichimon* and *fumon* is understood differently by different schools and groups, which have developed varying theories.

It is thought that a praxis issue regarding whether the resultant stage of Mahāvairocana is attainable in deity yoga involving other deities is a reason for the debate concerning *ichimon* and *fumon*. This paper examines this issue not from an exclusively doctrinal viewpoint, but also includes the perspective of practice. This emphasis on both doctrine and practice is a feature of Shingon Buddhism, and the development of this feature can be observed.

『密教文化』寄稿規程

第一条 『密教文化』は、日本およびアジア地域などにおける密教の思想や文化を中心として、広く仏教および宗教全般に対する学術研究論文などの掲載発表をもって、密教文化の学術的解明の発展に寄与することを目的とする。

第二条 『密教文化』に寄稿できる者は、次の通りとする。

(一) 密教研究会正会員

第三条 原稿は、原則として四百字詰原稿用紙五十枚以内とする。ただし、編集委員会が認める場合、この限りではない。

第四条 写真、図版等の掲載は、一原稿につき五点までとする。それを上回る数の写真、図版等の掲載を希望する場合、その印刷に要する経費について、編集委員会は寄稿者に請求することができる。

第五条 寄稿された原稿は、完成原稿でなければならぬ。当該原稿は、査読委員会の査読を経て、編集委員会が掲載の可否および掲載の時期、印刷の体裁を決定する。また、編集委員会は、寄稿者に補筆および修正を求めることができる。

第六条 原稿料の支払い、掲載料の徴収は行わない。

第七条 寄稿者には、掲載紙二部および抜版三十部まで贈呈する。

附則
一、本規程は、平成九年六月二十七日から施行する。
二、この規程は、平成十五年十一月二十五日に改正し、平成十六年四月一日から適用する。

付記 寄稿論文には、和文要旨原稿(二百文字から四百文字)を添え、さらに「投稿論文添付用紙」に必要事項を記入の上、ご提出ください。「添付用紙」はインターネットで「密教研究会」のホームページからダウンロード出来ます。

印字原稿を提出の場合、プリントアウトした原稿とデータを保存した電子媒体(FDやCDなど)も同封してください。あるいは、ワープロとPDFの両データをEメールにて送付してください。

編集後記

『密教文化』第二四一号(平成三十年年度)をお届けします。本号は、平成三十年年度学術大

会で発表されたものを収録しています。本年度は、高野山大学客員教授である高岡義寛先生に「密教と科学の架橋：空(宇宙)と海(生命)」というテーマでご講演をいただきました。本年度は、高野山現存の論議書に関する考察から、有部、中観、瑜伽行唯識、チベット大蔵経に関する文献考察まで幅の広い論稿が集められました。今後ますます密教文化の裾がりを検証する投稿を期待しております。

平成三十年十二月二十日印刷
平成三十年十二月二十一日発行

第二四一号
会 員 頒 布
平成三十年度 第一号
和歌山県高野山大学内

編集兼 密教研究会
発行者 会長 奥山直司

電話 〇七三六一五六一二九二一(代)
FAX 〇七三六一五六一二七四六
郵便番号 六四八〇二八〇
振替 〇〇九五〇一四四一七六

印刷所 和歌山県和歌山市梶取一七一
株式会社ウイング

計良龍成

2016 「『中觀光明論』(Madhyamakāloka) 後主張第1章「聖典による一切法無自性性の証明」の研究(1) -和訳・註解・チベット語校訂テキスト-」, *Acta Tibetica et Buddhica* 9, 1-121頁。

李学竹・加納和雄

2013 「梵文『牟尼意趣莊嚴』(Munimatālamkāra) 第一章の和訳と校訂一冒頭部一」, 『密教文化』229, 37-63頁。

2014 「梵文『牟尼意趣莊嚴』第1章末尾部分の校訂と和訳一『中觀光明』一乗論証段の梵文断片の回収一」, 『密教文化』232, 2014年, 7-42頁。

2015 「梵文校訂『牟尼意趣莊嚴』第一章 (fol. 48r4-58r5) -『中觀五蘊論』にもとづく一切法の解説一」, 『密教文化』234, 7-44頁。

2017a 梵文校訂『牟尼意趣莊嚴』第一章 (fol. 58r5-59v4) -『中觀光明』四諦説三性説箇所佚文一, 『密教文化』238, 2017, 7-27頁。

2017b 「梵文校訂『牟尼意趣莊嚴』第一章 (fol. 59v4-61r5) -『中觀光明』世俗の定義箇所佚文一」, 『密教文化』239, 2017, 7-26頁。

李学竹・加納和雄・横山剛

2015 「梵文和訳『牟尼意趣莊嚴』一切法解説前半部一」, 『インド学チベット学研究』19, 139-157頁。

2016 「梵文和訳『牟尼意趣莊嚴』一切法解説後半部一」, 『インド学チベット学研究』20, 53-75頁。

(欧文論文)

Kapstein, Matthew

2001 Abhayākaragupta on Two Truths. In: Kapstein, *Reason's Traces*, Boston: Wisdom Publications, pp. 393-415.

(本論文の草稿段階において、Harunaga Isaacson、苫米地等流、種村隆元、久間泰賢、林玄海各氏によるご教示を受けました。記して謝意を表します。)

(平成30年度科学研究費助成、課題番号 [18H03569] [17K0022] [16K13154] [18K00074] の研究成果。)

プダク写本チベット大蔵經における 經函末部の解説文について

徳重弘志

はじめに

チベット大蔵經には様々な写本・版本が存在するが、それらは「ツェルパ系統」⁽¹⁾、「テンバンマ系統」⁽²⁾、「独立系統」に大別することができる。本稿で扱うプダク写本は、それらのうちの「独立系統」に分類されている。

プダク写本は、渡辺 [1995:(10)] が指摘しているように、ダライ・ラマ6世の長寿と幸運を祈念してラダックのプダク寺⁽³⁾において編纂され、1697年から1705年にかけて書写されたものである。また、佐藤 [2008:76-77] による先行研究⁽⁴⁾の要約に従えば、当該の写本には、他のカンギェルには含まれていない複数の經典や多くの異訳が収録されていることから、「全集」(edition)ではなく「収集品」(collection)である可能性が存在する。しかし、プダク写本が編纂された経緯を記した資料が発見されていないことから、先行研究における学説は推測の域を出てはなかった。

さて、拙稿 [2017] で指摘したように、プダク写本における特定の経函の末部には、当該の経函に収録された經典に対する「解説文」が存在する。この「解説文」は、特定の經典に対する注釈的な記述、経函に収録された經典名の列記、回向文、といった要素から構成されている。

本稿は、プダク写本の全経函を対象として、経函末部における「解説文」の有無や、「解説文」の所在を整理した上で、どの經典に対して注釈が行われているのかを明示することを目的としている。

1. 先行研究

ブダク写本には、2種類のカatalog (SAMTEN [1992], EIMER [1993]) が存在する。しかし、両カatalogは、経函末部の「解説文」の存在を見逃しており、直前の経典の一部として扱っている。そのため、「解説文」の存在をはじめて指摘したのは拙稿 [2017] であり、それ以前には「解説文」に関する研究は行われていない。なお、それ以降の研究としては、2017年に開催された密教文化研究所研究会（於 高野山大学）における、筆者と岡田英作氏（愛媛大学特定研究員）による共同研究の口頭発表⁽⁵⁾が挙げられる。

先行研究の検討に先立ち、ブダク写本の経函（全120函）の分類と、対応する経函の番号（Vol.）について、EIMER [1993: vi-vii] に基づいて整理すると、以下のようになる。

経函の分類	Vol.
'Dul ba (律部)	1-13
Shes phyin (般若部)	14-42
Phal chen (華嚴部)	43-47
dKon brtsegs (宝積部)	48-53
mDo sde (經部)	54-98
rGyud (タントラ部)	99-119
dKar chag (目録部)	120

先行研究のうち、拙稿 [2017] では、「rGyud (タントラ部)」に属するVol. 107とVol. 109に「解説文」が存在することを指摘した上で、Vol. 107における「解説文」の校訂テキストおよび和訳を提示した。その上で、「解説文」の内容に基づいて、ブダク写本に先行する「詳細不明のチベット語訳経典のセット」が存在した可能性、解説文の成立年代、解説文の作者、といった点について言及した。

第一に、ブダク写本に先行する「詳細不明のチベット語訳経典のセット」が存在した可能性に関しては、Vol. 109における特定の経典に対する注釈

的な記述が根拠となっている。具体的には、Vol. 109にはPh nos. 481-487という7本の経典が収録されているが、当該の経函における「解説文」では、Ph no. 481 (D no. 485)、Ph no. 484 (D no. 489)、Ph no. 487 (D no. 486)、D no. 490、D no. 491、という5本の経典に対して注釈が行われている。ここで注目すべきは、D no. 490とD no. 491は、現行のブダク写本には収録されていないという点である。このことを根拠として、両経典を含む「詳細不明のチベット語訳経典のセット」が存在し、それを参照してブダク写本が編纂された際に両経典が欠落した、という蓋然性が高いと指摘した⁽⁶⁾。

第二に、解説文の成立年代に関しては、ブダク写本と「解説文」とでは収録経典に相違が見られることから、「解説文」が作成されたのは「詳細不明のチベット語訳経典のセット」の時点であると推定できる。そのため、ブダク写本の編纂された年代（1697-1705年）は、成立の下限を示すにすぎない。他方、成立の上限については、Vol. 109における「解説文」が、サキャ・パンディタ (Sa skya Paṇḍita Kun dga' rgyal mtshan, 1182-1251) に言及していることから、少なくとも13世紀中葉以降であると指摘した⁽⁷⁾。

第三に、解説文の作者に関しては、Vol. 107とVol. 109には本人による記名は存在しない。ただし、「チベットのラマたち」(bod kyi bla ma rnam)⁽⁸⁾の説に言及していることから、チベット人の僧侶が作者である蓋然性が高いと指摘した⁽⁹⁾。

以上が、拙稿 [2017] の概要であるが、この時点では全120函のうち2函しか調査を行うことができず、他の経函に「解説文」が存在するか否かさえも不明であった。

他方、先行研究のうち、密教文化研究所研究会における口頭発表では、経函全体の約半数に相当するVols. 65-120を対象として「解説文」の有無を調査し、発見し得た「解説文」の校訂テキストおよび和訳を作成した上で、新たに判明した事項を発表した。具体的には、ブダク写本が「収集品」である根拠、「解説文」の内容構成、「詳細不明のチベット語訳経典のセット」の存在を裏付ける追加資料、といった点について扱った。

第一に、ブダク写本が「収集品」である根拠に関しては、「解説文」の有無が決め手となった。つまり、「解説文」が特定の範囲の経函にしか存在しないのであれば、その範囲は収集品であり、後代に他の収集品と統合されて現行のブダク写本が成立したと考えられる。そこで調査を行った結果、「mDo sde (経部)」、「rGyud (タントラ部)」、「dKar chag (目録部)」のうち、「解説文」が存在するのは「rGyud (タントラ部)」のみであることが判明した。そのため、当該の範囲は「収集品」であると判断した。

第二に、「解説文」の内容構成に関しては、①特定の経典に対する注釈的な記述、②経函に収録された経典名の列記、③回向文、という構成要素が組み合わされていることが判明した。なお、「解説文」の直後に、縁起法頌(法身偈)⁽¹⁰⁾や特定の真言などが付加されている場合もあるが、それらは「mDo sde (経部)」の経函末部にも付加されているため、「解説文」の一部では無いと判断した。

第三に、「詳細不明のチベット語訳経典のセット」の存在を裏付ける追加資料に関しては、Vol. 101における「解説文」を発見することができた。具体的には、ブダク写本における当該の経函に収録されている経典数(12本)と、「解説文」で言及されている経典数(15本)とが相違することから、「詳細不明のチベット語訳経典のセット」が存在したという説の蓋然性が高まった。

以上が、密教文化研究所研究会における口頭発表の概要であるが、この時点でも全120函のうちの半数までしか調査を行うことができず、「Dul ba (律部)」や「Shes phyin (般若部)」などにおける「解説文」の有無は不明であった。

2. 経函末部における「解説文」の有無

先述したように、先行研究の段階では、全120函のうちのVols. 65-120が調査対象であった。本稿では、経函全体(Vols. 1-120)を対象として、

経函末部における「解説文」の有無を調査した。その調査結果を整理したものが、以下の【表A】である。

なお、【表A】では、「Vol.」、「経函の分類」、「解説文」、「縁起法頌」⁽¹¹⁾、「真言①」、「真言②」、「追記」、という7つの項目を設けた。これらのうち、「Vol.」はブダク写本における経函の番号を、「経函の分類」は律部や般若部といった分類を、それぞれ表している。そして、それ以外の5つの項目が、経函末部における特定の記述の有無を表している。なお、ここでの「真言①」とは“om su pra tiṣṭha badzra ye swāhā”のことを、「真言②」とは“om ma ṇi padme hūm” (六字真言)のことを、「追記」とは“mangga lam bhawantu”、“zhus dag go”、“dge'o”などといった記述のことを、それぞれ指している⁽¹²⁾。

Vol.	経函の分類	解説文	縁起法頌	真言①	真言②	追記
1	'Dul ba	×	○	○	×	×
2	'Dul ba	×	×	×	×	○
3	'Dul ba	×	×	×	×	○
4	'Dul ba	×	×	×	○	○
5	'Dul ba	×	×	×	×	○
6	'Dul ba	×	×	○	×	○
7	'Dul ba	×	×	×	×	○
8	'Dul ba	×	×	×	×	○
9	'Dul ba	×	×	○	×	×
10	'Dul ba	×	×	×	×	×
11	'Dul ba	×	×	×	×	○
12	'Dul ba	×	×	×	×	○
13	'Dul ba	×	×	×	×	○
14	Shes phyin	×	×	×	×	×
15	Shes phyin	×	×	×	×	○
16	Shes phyin	×	×	×	×	○
17	Shes phyin	×	×	×	×	○
18	Shes phyin	×	×	×	×	○
19	Shes phyin	×	×	×	×	○
20	Shes phyin	×	○	×	×	○
21	Shes phyin	×	×	×	×	○
22	Shes phyin	×	×	×	×	○
23	Shes phyin	×	×	×	×	○

Vol.	経函の分類	解説文	縁起法頌	真言①	真言②	追記
24	Shes phyin	×	×	×	×	○
25	Shes phyin	×	×	×	×	○
26	Shes phyin	×	×	×	×	×
27	Shes phyin	×	×	×	×	○
28	Shes phyin	×	×	×	×	×
29	Shes phyin	×	○	○	×	○
30	Shes phyin	×	×	×	×	○
31	Shes phyin	×	×	×	×	○
32	Shes phyin	×	○	×	×	○
33	Shes phyin	×	×	×	×	○
34	Shes phyin	×	×	○	×	○
35	Shes phyin	×	○	×	○	○
36	Shes phyin	×	×	×	×	○
37	Shes phyin	×	×	×	×	×
38	Shes phyin	×	○	○	×	○
39	Shes phyin	×	○	○	×	○
40	Shes phyin	×	×	×	×	○
41	Shes phyin	×	×	×	×	○
42	Shes phyin	×	×	×	×	○
43	Phal chen	×	×	○	○	○
44	Phal chen	×	×	×	×	○
45	Phal chen	×	×	×	×	○
46	Phal chen	×	×	×	○	○
47	Phal chen	×	×	×	×	○
48	dKon brtsegs	×	×	×	×	○
49	dKon brtsegs	×	×	×	×	○
50	dKon brtsegs	×	×	×	×	○
51	dKon brtsegs	×	×	×	×	○
52	dKon brtsegs	×	×	×	×	○
53	dKon brtsegs	×	○	×	×	○
54	mDo sde	×	×	×	×	○
55	mDo sde	×	×	×	○	○
56	mDo sde	×	×	×	×	○
57	mDo sde	×	○	×	○	○
58	mDo sde	×	○	×	×	○
59	mDo sde	×	×	×	×	○
60	mDo sde	×	×	×	×	○
61	mDo sde	×	×	×	×	×
62	mDo sde	×	×	×	×	○
63	mDo sde	×	×	×	○	○
64	mDo sde	×	×	×	×	○
65	mDo sde	×	○	×	×	○

ブダク写本チベット大蔵經における経函末部の解説文について

Vol.	経函の分類	解説文	縁起法頌	真言①	真言②	追記
66	mDo sde	×	×	×	○	○
67	mDo sde	×	×	×	×	○
68	mDo sde	×	×	×	×	○
69	mDo sde	×	×	×	×	○
70	mDo sde	×	○	×	×	○
71	mDo sde	×	×	×	×	○
72	mDo sde	×	×	×	×	○
73	mDo sde	×	○	×	×	○
74	mDo sde	×	×	×	×	×
75	mDo sde	×	×	×	×	○
76	mDo sde	×	×	×	×	○
77	mDo sde	×	×	×	×	○
78	mDo sde	×	○	×	×	○
79	mDo sde	×	×	×	×	○
80	mDo sde	×	×	○	×	○
81	mDo sde	×	○	×	×	○
82	mDo sde	×	×	×	×	○
83	mDo sde	×	○	×	×	○
84	mDo sde	×	×	×	×	○
85	mDo sde	×	×	×	×	○
86	mDo sde	×	○	×	×	○
87	mDo sde	×	×	×	×	○
88	mDo sde	×	×	×	×	○
89	mDo sde	×	○	×	×	○
90	mDo sde	×	×	×	×	○
91	mDo sde	×	×	×	×	○
92	mDo sde	×	×	×	×	○
93	mDo sde	×	×	×	○	○
94	mDo sde	×	○	○	×	○
95	mDo sde	×	×	×	×	○
96	mDo sde	×	×	×	×	×
97	mDo sde	×	×	×	×	○
98	mDo sde	×	○	○	×	○
99	rGyud	×	×	×	×	○
100	rGyud	○	×	×	×	○
101	rGyud	○	○	○	×	○
102	rGyud	○	×	×	×	○
103	rGyud	○	×	×	×	○
104	rGyud	×	×	×	×	○
105	rGyud	○	×	×	×	○
106	rGyud	○	×	×	×	○
107	rGyud	○	×	×	×	○

密
教
文
化

Vol.	経函の分類	解説文	縁起法頌	真言①	真言②	追記
108	rGyud	○	×	×	×	○
109	rGyud	○	×	×	×	○
110	rGyud	○	×	×	×	○
111	rGyud	○	×	×	×	○
112	rGyud	×	×	×	×	○
113	rGyud	×	×	×	○	○
114	rGyud	○	×	×	×	○
115	rGyud	○	×	○	×	○
116	rGyud	×	×	×	×	○
117	rGyud	○	×	×	×	○
118	rGyud	○	×	×	×	○
119	rGyud	○	×	×	×	○
120	dKar chag	×	×	×	×	×

3. 解説文の所在

前掲した【表A】のように、ブダク写本（全120函）のうち、「解説文」が存在するのは、「rGyud（タントラ部）」に属する16個の経函においてのみである。そして、その「Vol.」（経函の番号）と、「解説文の所在」を整理したものが、以下の【表B】である。なお、「解説文の所在」における（ ）内の数字は、ブダク写本のマイクロフィッシュにおける所在である。

Vol.	解説文の所在
100	rGyud, <i>kha</i> , 357v4-358r7 (# 899 61D)
101	rGyud, <i>ga</i> , 341v1-342r6 (# 900 58D)
102	rGyud, <i>nga</i> , 293v4-294r5 (# 901 50D)
103	rGyud, <i>ca</i> , 368r2-5 (# 902 62C)
105	rGyud, <i>ja</i> , 329r7-330r4 (# 904 56A-B)
106	rGyud, <i>nya</i> , 279v8-280r8 (# 905 47E)
107	rGyud, <i>ta</i> , 418r7-419r7 (# 906 70D-E)
108	rGyud, <i>tha</i> , 351r6-352r5 (# 907 59E-F) ⁽¹³⁾
109	rGyud, <i>da</i> , 277v3-278r6 (# 908 47C)
110	rGyud, <i>na</i> , 359r8-9 (# 909 59D)
111	rGyud, <i>pa</i> , 350v4-351r7 (# 910 59B)
114	rGyud, <i>ma</i> , 328v6-329r6 (# 913 55E)

Vol.	解説文の所在
115	rGyud, <i>tsa</i> , 361r4-6 (# 914 61E)
117	rGyud, <i>dza</i> , 320r7-8 (# 916 54A)
118	rGyud, <i>wa</i> , 257v3-258r4 (# 917 41B)
119	lHa mo'i rgyud, <i>tsa</i> , 6r6-7r7 (# 918 65B-C)

4. 解説文で言及されている経典

前掲した【表B】のように、16個の経函の末部に「解説文」が存在する。また、先述したように、それらの「解説文」は、①特定の経典に対する注釈的な記述、②経函に収録された経典名の列記、③回向文、という要素から構成されている。

これらのうち、①と②に関しては注意点が存在する。①に関する注意点は、経函に収録されている全経典に対して注釈が行われている訳ではないということである。②に関する注意点は、「解説文」に列記された収録経典の名称は「詳細不明のチベット語訳経典のセット」に基づいており、現行のブダク写本の収録経典とは齟齬が見られるということである。そこで、対象となる16個の経函に収録された合計266本の経典について、①と②の対象か否かを整理したものが、以下の【表C】である。

なお、【表C】では、「Vol.」、「Ph」、「D」、「P」、「注釈」、「列記」という6つの項目を設けた。これらのうち、「Vol.」は、ブダク写本における経函の番号を表している。また、「Ph」はブダク写本の経典番号を表しており、それと対応するデルゲ版と北京版の経典番号が「D」と「P」である⁽¹⁴⁾。そして、「注釈」は①の有無を、「列記」は②の有無を、それぞれ表している。

なお、「列記」においては、当該の「解説文」に②という要素が含まれていない場合には、「斜線」で表した。また、②に「Ph no. 499 から Ph no. 530 までが収録されている」などと表記されている場合には、「Ph no. 500」などが省略されていることを「△」で表した。

Vol.	Ph	D	P	注釈	列記
100	415	442	81	×	○
100	416	443	81	×	○
100	417	445	82	×	○
100	418	444	83	×	○
100	419	446	85	×	○
100	420	447	84	×	○
100	421	451	86	×	○
100	422	466	102	○	○
101	423	468	105	×	○
101	424	469		×	○
101	425	474	109	×	○
101	426	467	103	×	○
101	427	473	104	×	○
101	428	454	89	×	○
101	429	461	97	×	○
101	430	476	110	×	○
101	431	477	111	×	○
101	432	436	75	×	○
101	433	431	70	○	○
101	434	432	71	○	○
102	435	366	8	×	○
102	436	367	9	×	○
102	437	368	16	×	○
102	438	368	16	×	○
102	439	374	21	×	○
102	440	375	23	×	○
102	441	376	24	×	×
102	442	377	22	○	○
102	443	377	22	○	○
102	444			○	○
103	445	372	19	×	
103	446	369	17	○	
105	457	417, 418	10	×	○
105	458	419	11	×	○
105	459	381	26	○	○
105	460	382	27	○	○
105	461	382	27	○	○
106	462	420	12	×	○
106	463	421	13	×	○
106	464	422	14	×	○
106	465	423	15	×	○
106	466	424	63	×	○

ブダク写本チベット大蔵経における経函末部の解説文について

Vol.	Ph	D	P	注釈	列記
106	467	425	64	×	○
106	468	428	67	×	○
106	469	429	68	×	○
106	470	435	74	×	○
106	471	439	78	○	○
107	472	479	112	○	○
107	473	480	113	○	○
108	474	481	114	×	
108	475	482	115	×	
108	476	487	119	×	
108	477	488	120	×	
108	478	483	116	×	
108	479	484		×	
108	480	544	163	○	
109	481	485	117	○	
109	482	492	122	×	
109	483	493	125	×	
109	484	489	121	○	
109	485	361	3	×	
109	486	365		×	
109	487	486	118	○	
110	488	494	126	×	○
110	489	496	130	×	○
111	490	604	291	×	×
111	491	502	134	○	○
111	492	498	128	×	×
111	493	805	428	○	○
111	494	806	429	○	○
111	495	807	431	○	○
111	496	808	430	○	○
114	499	681	364	×	○
114	500	703	386	×	△
114	501	702	385	×	△
114	502	703	386	×	△
114	503	701	375	×	△
114	504	700	376	×	△
114	505	689		×	△
114	506	693	373	×	△
114	507	725	389	×	△
114	508			×	△
114	509	683		×	△
114	510	691	369	×	△
114	511	682	366	×	△

密
教
文
化

Vol.	Ph	D	P	注釈	列記
114	512	140	539	×	△
114	513	687		×	△
114	514	688	527	×	△
114	515	697	378	×	△
114	516	750	406	×	△
114	517	751	407	×	△
114	518	748	132	×	△
114	519	747	404	×	△
114	520	752	408	×	△
114	521	754	410	×	△
114	522	744	403	×	△
114	523	658	335	×	△
114	524	753	409	×	△
114	525	761	413	×	△
114	526	762	414	×	△
114	527	763	415	×	△
114	528	759	411	×	△
114	529	760	412	×	△
114	530	952	96	○	○
115	531	746	402	×	○
115	532	766	424	×	○
115	533	767		×	○
117	616	726	390	×	○
117	617	729	393	×	△
117	618	730	394	×	△
117	619	731	395	×	△
117	620	558	177	×	△
117	621	559	178	×	△
117	622	561	179	×	△
117	623	562	180	×	△
117	624	563	181	×	△
117	625	590	202	×	△
117	626	592	204	×	△
117	627	590	202	×	△
117	628	591	203	×	△
117	629	599	206	×	△
117	630	595	197	×	△
117	631	597	198	×	△
117	632	598	200	×	△
117	633	740	399	×	△
117	634	613	188	×	△
117	635	758	187	×	△

ブダク写本チベット大蔵經における経函末部の解説文について

Vol.	Ph	D	P	注釈	列記
117	636	732	191	×	△
117	637	560	194	×	△
117	638	738	397	×	△
117	639	739	398	×	△
117	640	571	189	×	△
117	641	736	186	×	△
117	642	497	196	×	△
117	643	564	182	×	△
117	644	565	183	×	△
117	645	662	341	×	△
117	646	663	342	×	△
117	647	664	343	×	△
117	648	772	427	×	○
118	649	610	305	×	○
118	650	611	311	×	△
118	651	526	312	×	△
118	652			×	△
118	653	518	293	×	△
118	654	668	345	×	△
118	655	613	188	×	△
118	656	652	145	×	△
118	657			×	△
118	658	698	388	×	△
118	659	312	714	×	△
118	660	614	309	×	△
118	661	517	156	×	△
118	662	542	157	×	△
118	663	568	193	×	△
118	664	529	317	×	△
118	665	633	314	×	△
118	666	606	308	×	△
118	667	608	303	×	△
118	668	514	149	×	△
118	669	515		×	△
118	670	733	379	×	△
118	671	677	153	×	△
118	672	531	160	×	△
118	673	710	216	×	△
118	674			×	△
118	675	749	405	×	△
118	676	621	213	×	△
118	677	622	207	×	△

密
教
文
化

Vol.	Ph	D	P	注釈	列記
118	678	571	189	×	△
118	679	625	209	×	△
118	680	629	214	×	△
118	681	567	192	×	△
118	682	670	346	×	△
118	683	541	396	×	△
118	684	773	290	×	△
118	685	603	315	×	△
118	686	661	339	×	△
118	687	273	151	×	△
118	688	524	298	×	△
118	689	709	299	×	△
118	690	626	212	×	△
118	691	774	223	×	△
118	692	600	224	×	△
118	693	776	227	×	△
118	694	777, 778	228, 229	×	△
118	695	651	230	×	△
118	696	651	230	×	△
118	697	650	232	×	△
118	698	718	233	×	△
118	699	719	234	×	△
118	700	711	235	×	△
118	701	712	236	×	△
118	702	713	237	×	△
118	703	714	238	×	△
118	704	715	239	×	△
118	705	716	240	×	△
118	706	717	241	×	△
118	707	779	343	×	△
118	708	780	243	×	△
118	709	781	244	×	△
118	710	539	245	×	△
118	711	782	246	×	△
118	712	783	247	×	△
118	713	784	248	×	△
118	714	787	251	×	△
118	715	788	252	×	△
118	716	789	253	×	△
118	717	790	254	×	△
118	718	791	255	×	△
118	719	792	256	×	△

ブダク写本チベット大蔵經における経函末部の解説文について

Vol.	Ph	D	P	注釈	列記
118	720	793	257	×	△
118	721	794	258	×	△
118	722	795	259	×	△
118	723	796	260	×	△
118	724	797	261	×	△
118	725	798	262	×	△
118	726	799	263	×	△
118	727	800	264	×	△
118	728	801	265	×	△
118	729	802	266	×	△
118	730	803	267	×	△
118	731	1059	268	×	△
118	732	505 (b)	225	×	△
118	733	742	270	×	△
118	734	576	271	×	△
118	735	577	272	×	△
118	736	578	273	×	△
118	737	579	274	×	△
118	738	580	275	×	△
118	739	581	276	×	△
118	740	582	277	×	△
118	741	583	278	×	△
118	742	584	279	×	△
118	743	585	280	×	△
118	744	586	281	×	△
118	745	588	283	×	△
118	746	589	284	×	△
118	747	649	353	×	△
118	748	540	352	×	△
118	749	647	355	×	△
118	750	646	356	×	△
118	751	648	357	×	△
118	752	804	358	×	△
118	753	832	455	○	○
118	754	832	455	○	○
119	755	440	79	×	○
119	756			×	○
119	757			×	○
119	758	416	62	×	○
119	759			×	○
119	760			×	○
119	761			×	○

密
教
文
化

Vol.	Ph	D	P	注釈	列記
119	762			×	○
119	763			×	○
119	764			×	○
119	765			×	○
119	766			×	○
119	767	668	345	×	○
119	768	667	344	×	○
119	769	671	348	×	○
119	770			×	○
119	771			×	○
119	772			×	○
119	773			×	○
119	774			○	○

おわりに

本稿では、ブダク写本の全経函を対象として、経函末部における「解説文」の有無、「解説文」の所在、解説文で言及されている經典、といった3点に関する情報を整理した。

第一に、経函末部における「解説文」の有無について整理したものが、【表A】である。これによって、ブダク写本（全120函）のうち、「解説文」が存在するのは、「rGyud（タントラ部）」に属する16個の経函においてのみであることが判明した。

なお、多くの経函の末部に、「縁起法頌」、「真言①」、「真言②」、「追記」といった要素が共通して用いられていることも判明した。これらの要素は、元々は「収集品」であったと考えられる「rGyud（タントラ部）」にも散見される。そのため、これらの要素は、ブダク写本が編纂される際に、ブダク寺で追記されたものであると推定できる⁽¹⁵⁾。

第二に、「解説文」の所在について整理したものが、【表B】である。なお、それらの「解説文」に関しては、筆者と岡田英作氏が共同して、校訂テキストおよび和訳をすでに完成させている。その成果については、いず

れかの学術誌において、逐次公表していく予定である。

第三に、解説文で言及されている經典について整理したものが、【表C】である。これによって、「解説文」の直前の經典（当該の経函末部に位置する經典）に対して、優先的に注釈が行われる傾向にあることが判明した。

なお、先行研究では、「詳細不明のチベット語訳經典のセット」の存在を裏付ける資料として、Vol. 101とVol. 109における「解説文」を挙げていた。今回の調査によって、Vol. 102とVol. 111における「解説文」においても、ブダク写本における当該の経函に収録されている經典数と、「解説文」で言及されている經典数とが相違することが判明した。これによって、「詳細不明のチベット語訳經典のセット」が存在したという説の蓋然性がさらに高まった。

略号表

- D sDe dge edition of the Tibetan Tripiṭaka（デルゲ版チベット大蔵經）
 n. note（注記）
 P Peking edition of the Tibetan Tripiṭaka（北京版チベット大蔵經）
 Ph Phug brag manuscript of the Tibetan Tripiṭaka（ブダク写本チベット大蔵經）
 r recto（写本・版本の表面）
 v verso（写本・版本の裏面）

参考文献

- 遠藤祐純
 [2016]『ブトン造『総タントラ部解説“タントラ部なる宝の妙嚴飾”という書』『瑜伽タントラの海に入る船』和訳』、ノンブル社。
 酒井紫朗（眞典）
 [1975]「法身偈の眞言化について」、『密教文化』111: pp. 1-10。
 佐藤直実
 [2008]『藏漢訳『阿闍世經』研究』、山喜房佛書林。
 徳重弘志
 [2017]「『金剛頂タントラ』のブダク写本について—経函末部に付された「註釈文」を中心に—」、『密教文化』238: pp. 104(29)-80(53)。
 渡辺章悟
 [1995]「チベット大蔵經カンギュル（経部）の伝統と『理趣經』の校訂」。

『大般若と理趣分のすべて』北辰堂: pp.(1)-(12).

EIMER, Helmut

[1993] *Location List for the Texts in the Microfiche Edition of the Phug brag Kanjur: Compiled from the Microfiche Edition and Jampa Samten's Descriptive Catalogue*, Bibliographia Philologica Buddhica V, Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies.

HARRISON, Paul

[1994] "In Search of the Source of the Tibetan Bka' 'gyur: A Reconnaissance Report," *Tibetan Studies: Proceedings of the 6th Seminar of the International Association for Tibetan Studies, Fagernes 1992*, Oslo: The Institute for Comparative Research in Human Culture, vol. 1, pp. 295-317.

SAMTEN, Jampa

[1992] *A Catalogue of the Phug-brag Manuscript Kanjur*, Dharamsala: Library of Tibetan Works & Archives.

注

- (1) 「ツェルパ系統」には、永楽版(1410年)、ジャンサタム／リタン版(1608-21年)、北京版(1717-20年)、チョネ版(1721-31年)、デルゲ版(1733年)、ウルガ版(1911年)、といった版本が属している。
- (2) 「テンバンマ系統」には、ロンドン／シエルカル写本(1712年)、トクパレス写本(1729年頃)、ナルタン版(1730-32年)、東京写本(東洋文庫所蔵河口コレクション)(1858-78年)、ラサ版(1934年)、といった写本・版本が属している。
- (3) プダク寺の概要については、SAMTEN [1992: ii-iii] を参照。
- (4) Cf. SAMTEN [1992: xi-xxx], HARRISON [1994: 298] .
- (5) 当該の口頭発表の成果については、学術誌への投稿を行っていない。
- (6) Cf. 拙稿 [2017: 80(53)n. 79] .
- (7) Cf. 拙稿 [2017: 93(40)-92(41)] .
- (8) Vol. 107における「解説文」(拙稿 [2017: 95(38), [3.3] - [3.5]])では、『金剛頂タントラ』の説処に関する「ラマたち」の見解に言及されている。これに関連して、拙稿 [2017] の段階では見落としていたが、プトゥン (Bu ston Rin chen grub, 1290-1364) が著した『総タントラ部解説』(東北蔵外 no. 5169)には、これとほぼ同一の記述(遠藤 [2016: 308-309])が存在する。そのため、「解説文」の作者は、『総タントラ部解説』を参照し、引用を行っているかと判断することができる。ただし、「解説文」の作者は、常にプトゥンの見解に同意している訳ではない。例えば、Vol. 108の「解説文」においては、『一勇者成就と名づける大タントラ王』(Ph no. 480)に関して、プトゥンによる「所作タントラ」に区分され

るという見解(遠藤 [2016: 176])に言及した上で、「瑜伽タントラ」に区分されるべきだと主張している。

(9) Cf. 拙稿 [2017: 93(40)].

(10) 縁起法頌(法身偈)とは、以下の偈頌のことである。

ye dharmā hetuprabhavā hetuṃ teṣāṃ tathāgato hy avadat |
teṣāṃ ca yo nirodha evaṃ vādī mahāśramaṇaḥ ||

なお、酒井 [1975: 2] が指摘しているように、縁起法頌は後代になると、その前後に“om”と“svāhā”が付されて、心呪あるいは真言として扱われるようになる。プダク写本においても、Vols. 20, 38, 101の末部における縁起法頌には“om”と“svāhā”が、Vols. 53, 65, 70, 73, 81, 86, 89の末部における縁起法頌には“svāhā”のみが、それぞれ付されている。

(11) 管見のおよぶ限りでは、Vol. 29を除けば、経函の末部に位置する經典の末尾に「縁起法頌」が付されているのは、Phにおいてのみである。なお、Vol. 29の末部の經典はPh no. 7 (D no. 8, P no. 730)であるが、この經典の末尾に関しては、Ph以外の諸版にも「縁起法頌」が存在する。

(12) 「真言①」と「真言②」以外の真言(om wa gi shwa ri mumやom badzra pa ni hūmなど)が付されている経函もあるが、煩雑になることを避けるため、それらの用例の有無については割愛した。

(13) EIMER [1993]では、「# 907908」と誤記されているので、「# 907」に修正した。

(14) 「Ph」、「D」、「P」の対応関係については、EIMER [1993]に基づいている。ただし、EIMER [1993]では、Ph no. 460 (Pに関する誤記)、Ph no. 626 (Dに関する誤記)、Ph no. 644 (Pに関する誤解)、Ph no. 732 (DとPに関する誤解)、Ph no. 768 (Pに関する誤解)、Ph no. 769 (Pに関する誤解)に関して、対応関係に誤記や誤解が存在するため、本稿ではそれらを適宜修正している。なお、Ph no. 732と対応するのは、D no. 505(b) (rGyud, da, 286r6-7)であり、D no. 505(a) (rGyud, da, 284r1-286r6)ではない。

(15) 「縁起法頌」、「真言①」、「真言②」、「追記」といった個々の要素の有無という点では、経函ごとに相違が見られる。それらの相違が何に起因するのかについては、今後の課題としたい。

(本稿執筆に際して、岡田英作氏(愛媛大学特定研究員)のご厚意により、複数の資料を複写して頂いた。この場にて、岡田氏に厚く御礼申し上げたい。)

〈キーワード〉 プダク写本, Phug brag manuscript, チベット大蔵経,
経函末部の「解説文」